



©Jリーグフォト

特集②

8人制と11人制の検証(前編)

U-12年代における8人制と11人制の検証一覧

8人制に対する不安

プレーする選手数が減ってしまうのか?
11人⇒8人

点差の広がるゲームが増えるのでは?

ピッチが狭くなり、ゴールが近くなる
ので、蹴り合いが増えるのでは?

サッカーは11人でやるもの。
8人になるとサッカーらしくなくなる。

結果 2011年全国少年サッカー大会より

予選全体の参加チーム数は増えたが、
参加人数の総数は減った。

5点差以上ついた試合の数に大きな変化は
なし。

失ったパスの軌跡のデータより、
相手陣内までボールが運べている。
4本以上つながったパスの本数が増えた。

バランス良くポジションをとることが求められる。
U-12年代の11人制では、分業しても戦える。
8人制では、全員が攻守に関わるチームが多い。
サッカーの原理原則を体現している場面が多い。



分析から明らかになったこと 2011年全国少年サッカー大会より

選手のプレー回数、
プレー時間が増えた

シュート数が増えた

攻撃の組み立ての
バリエーションが増えた

GKのプレー回数が
攻守に増えた
多くのプレーをするようになり、
GKに注目が集まる

ゴール前の攻防の
機会が増えた

DFの得点が増えた

1 出場人数

(1) 都道府県予選参加チーム数比較

2010年第34回全日本少年サッカー大会:
7,766チーム(宮崎県を除く)

2011年第35回全日本少年サッカー大会:
8,574チーム(うち宮崎県93チーム)

※2011年大会より、都道府県予選の1クラブ複数チーム参加を可能としている。

◆2011年より都道府県予選複数チーム参加を可能としたことにより、参加チームが大幅に増えた。しかし、ピッチでの選手数である、11人と8人をチーム数で掛けた数では、2010年度の方が多かった。

◆2011年の都道府県予選に複数チーム参加をした都道府県は、31協会であった。これは、大会運営面やチーム側の対応の準備が進めば、今後さらに増えることが予想さ



©Jリーグフォト

れる。

- ◆チーム数増の別の要因としては、少子化等の事情により、チームの人数が少なくなってチームが編成できないケースが増えてきていると聞いているが、8人制にしたことによりチーム編成が可能となり、参加できるようになったチームがあったことも考えられる。

(2) 試合出場人数比較

11人制から8人制となることで、「実際にピッチでプレーする人数が減る」という意見が、8人制に対する反対意見で一般的であるが、実際に11人制であった2010年大会と8人制となった2011年大会を比較すると以下の通りとなった。

	2011年大会	2010年大会
チーム登録人数(上限)	16人登録	18人登録
全員出場	24チーム 50%	20チーム 38.8%
全員10分以上出場	11チーム	6チーム
出場13人以下	13チーム	5チーム
出場10人以下 (FP人数+2名)	4チーム	—
出場0分の人数	74 9.7%	75 9.1%
	133試合	130試合 ^(※)

※例年48チーム135試合。宮崎県代表は口蹄疫の問題のため予選を開催できず不参加

- ◆全員出場をさせたチームは全体の50%に

増えている。

- ◆そのうち全員が10分以上出場したチームも6チームから11チームに増えている。
- ◆出場がチームの13人以下にとどまったチームは昨年5チームに対して、2011年大会は13チームであったが、フィールドプレイヤー(FP)+2名として比較すると、2011年大会でも4チームであった。
- ◆大会に登録されたにもかかわらず、出場が0分であった選手数は2010年大会75名、2011年大会74名で変わらないが、登録人数に対する割合は微増であった。

<プレーした選手数の検証>

複数チームの出場で参加チーム数は増加した。また、全国大会においてはチームとして、より多くの選手にプレーさせながら戦ったチームは増えており、8人制になったことで、その分、1チーム平均3名分の交代出場が減ったということはなかった。チーム数は増えたが、(チーム数)×(11人または8人のピッチに立てる選手数)では、2010年を下回っている。今後は複数チームの出場を行っていないFA(約1/3)が、複数チーム出場できる環境をそろえて、出場チーム数を増やしていきたい。そして、年間リーグをやり込んで選手層を厚くしていくことが、ノックアウトシステムの大会でも多くの選手をピッチに立たせることにつながると思われる。多くの選手に良い経験を積ませることは、指導者のフィロソフィーに負うところが大きい。

2011年度の全国大会において特別賞となった兵庫FCは、ほとんどの試合で毎試合全員を出場させつつ、1次ラウンドをトップで勝

ち上がる好成績を収めた。

8人制の方が各選手の運動量が多く、体力的にもより多くのフレッシュな選手にプレーさせながら戦う方が合理的であることが挙げられる。

8人制導入に伴い、インプレー中の自由な交代が採用された。大会の中で試合を重ねるごとに選手もこの交代に慣れ、スムーズに、時間の浪費なく、多くの交代が行われていた。この要素は、「6.その他(1)インプレータイム」(次号掲載予定)の増加にも貢献していると考えられる。

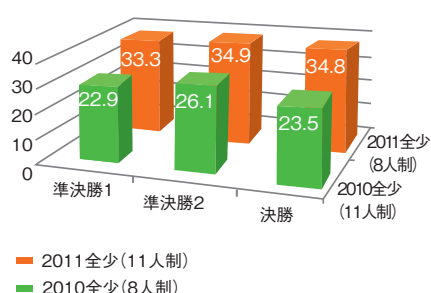
先行して8人制を採用している「JA全農杯チビリンピック」では、3ピリオド制をとり、第1ピリオドと第2ピリオドでは全員交代、第3ピリオドは自由、という考え方をとっている。このような方法をルールとする方法も考えられるが、少人数チームの参加が難しい等の問題もあり、ルールよりも考え方によって多くの選手にプレー機会を与えていくことを推奨していきたい。

今後、運営面等の対応を進め、多くの選手を擁するクラブにおける複数チームの出場をさらに推進し、多くの選手たちが良い経験を十分に積めるようにしていくことが重要である。

また、年間リーグを定着させていく中で、8人のレギュラーメンバーだけではリーグを戦い抜くことは困難である。シーズンを通して好調の選手を起用していく中で、チームの選手層を厚くすることを行っていくことも進めていく。

2 選手のプレー回数

(1) 1ゲームにおけるプレーヤー1人のプレー数(決勝、準決勝)



◆2010年大会(11人制)と2011年大会(8人制)の決勝、準決勝において、プレイヤー1人当たりのプレー回数の平均は、11人制が24.3回で、8人制が34.3回となり、8人制の方がプレー回数は1.4倍多くなった。プレー数で見ると、1人が1試合で平均10プレー多くプレーできる結果となった。

<プレー数の検証>

8人制の方がプレイヤー1人のプレー数が多かった。このことに関しては、今回のデータだけでなく、常に報告されている。スモールサイドゲームの特徴であり、プレー回数が多く同じような場面を繰り返すことで、選手の技術力と

判断力を鍛えていける。

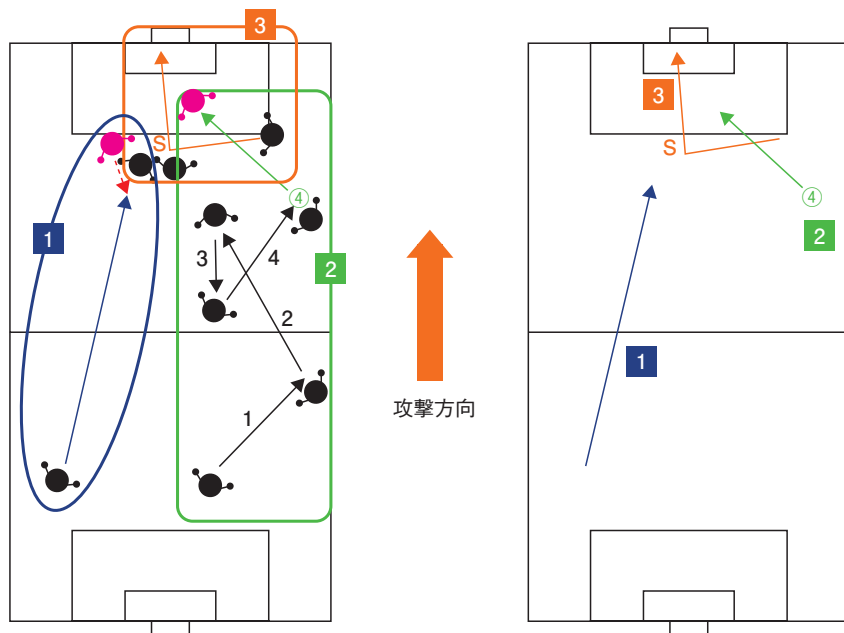
今回の8人制では1ゲームで、1人が34.3回のプレーができ、1分少々に1プレーを行えることとなる。

また、1対1の局面の回数が多く、特に守備の面で、全体の人数が少ない分、一人一人の責任がより大きくなることで、守備の意識としっかりとした対応がさらに重要になる。実際に、選手も守備をさばらなくなっていた。

1ゲームにおけるプレー回数だけでなく、それを積み重ねて1カ月、1年と考えていったときのプレー回数の違いは大きなものになる。

3 失ったパス(ボールの軌跡)

失ったパス(ボール)の軌跡図の解説



①青1番:自陣から縦へのフィードを相手にインターセプトされ、ボールを失った場合は、失ったパスの起点と終点を結んだ矢印を右図のように記す。

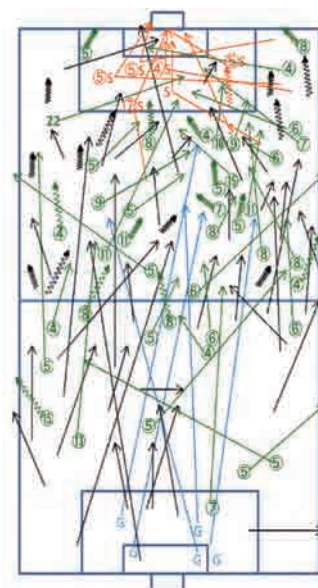
②緑2番:パスを4本以上成功させた場合は、ボールを保持した回数としてカウントする。その場合は、それまで成功したパスの回数をパスの起点に書き、失ったパスの起点と終点を緑の矢印で記す。

③オレンジ3番:シュートに関しては、アシストのパスの起点からシュートをうった地点を結び、シュート地点にS字を書いて、オレンジ色の矢印を記す。

(1) 世界のトップレベルの検証

スペインの2010 FIFA ワールドカップ決勝での失ったパス(ボール)の軌跡からの考察

2010 FIFA ワールドカップ 決勝
スペイン(延長含まず)



※データだけでは読み取れない部分もある。ゲーム自体を見た目とリンクさせて、データを使うことが重要。

◆自陣ではボールを失わずに、相手陣内に起点をつくっていることが多い。4本以上のボール保持も47回であり、高いボール保持率を表している。

(理由)

- ・自チームがボールを保持しているときには、ボールを失わない高い技術力を有している。特にGK、DFも含めて攻撃を組み立てることで、自陣ではボールを失わない。(GKもFPと遜色ない技術力と判断力を有している)
- ・バランスの良いポジションどりができている。そのため主導権を取るための選択肢が多い。その中で状況に応じた判断ができ、相手の守備を困難にさせている。
- ・バランスの良い攻撃がボールを奪われても、早い守備への移行を可能にしている。

そのことが相手にボールを奪われても、下
がらずに前で奪える機会を増やしている。

- ◆ボールを保持するために、単に安全な選
択をしていない。高い技術力と判断力、そ
れを可能にする動きの量と質を兼ね備え、
ゴールに向かい得点を奪うことから逆算し
たサッカーができています(実際のゲームも
含めて検証)。

FIFAワールドカップで優勝した国を追いか
けてコピーするのではなく、世界のサッカーの
方向性を認識し、将来のサッカーを予測する
ことは必要だと考えている。世界のサッカーは
「よりテクニカルに」「よりスピーディーに」「よ
りタフに」進化している。そして、この傾向は
将来も続くと考えられる。

また、今回優勝したスペインは身体的な特
徴としては日本人に似ているところがあり、ス
ペインの優勝はわれわれにも勇気を与えてく
れたと思われる。その意味でスペインのサッ

カーを見ていくと、11人全員が攻守に関わり
続けるサッカーを行っている。11人全員が
フットボーラーであり、GKも含めて自陣から
攻撃の組み立てを行っている。ボールを失わ
ないために、先手を取れるポジショニングから
選択肢のある攻撃を行い、攻撃のバランス
の良さによって、ボールを失っても下がらず
に、全体が前に奪いに行くことができています。
このことを可能にしている要素としては、個
人の技術力の高さと、攻守に関わり続ける
運動量と質が挙げられる。

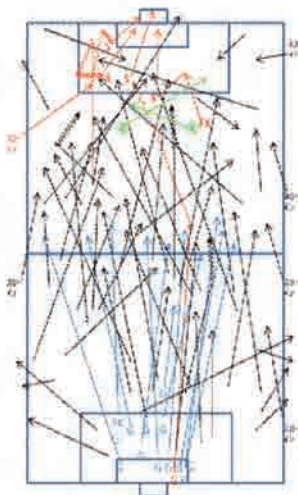
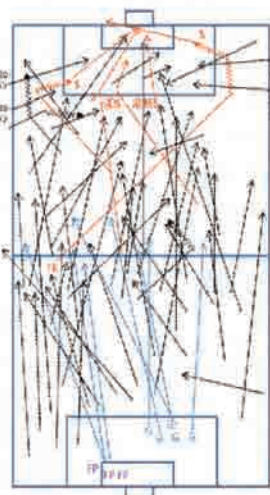
そして、このような選手を育成するため
には、必要な要素を育成年代全体で積み上げ
ていかなければならない。日本が世界のトップ
と肩を並べるためには、この積み上げこそが
最も重要であり、そのスタートはキッズやジュ
ニア(U-12)年代だと考えられる。

(2) 国内のU-12年代の検証

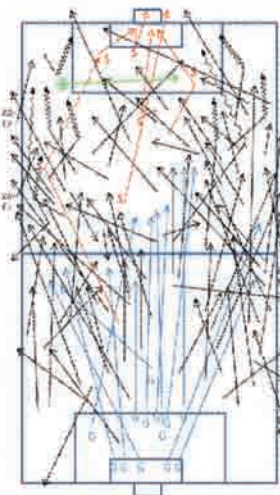
①2010年全国少年サッカー大会(11人制)

2010年 全日本少年サッカー大会決勝 11人制サッカー

タウンクラブ



準優勝 Jクラブ



- ◆自陣から縦に長いパスでボールを失っていることが多い。
- ◆GKから直接失っている回数が多い。
- ◆意図のあるパスではなく、ラフなロングフィードのセカンドボールを拾う攻撃を繰り返している(実際のゲームも含めて検証)。
- ◆4本以上のボール保持は1ゲーム(40分ゲーム)平均1回であった。
- ◆流れの中でのシュートは1ゲーム平均4.7本となった。

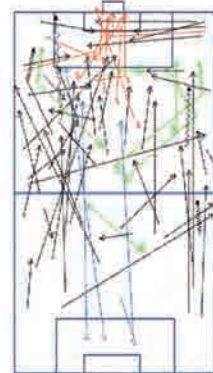
②2011年全国少年サッカー大会・チビリンピック(8人制)

2011年 全日本少年サッカー大会決勝 8人制サッカー

Jクラブ

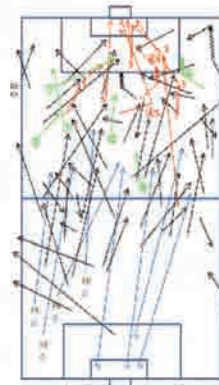


Jクラブ

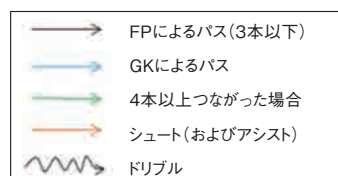
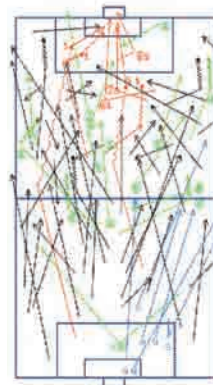


2011年チビリンピック決勝 8人制サッカー

Jクラブ



Jクラブ



- ◆11人制に比べて自陣からのロングパスで失っているチームが少ない。また、自陣からの縦パスもグラウンダーで意図のあるパスが多い(映像も含めて検証)。
- ◆11人制と比べて、GKから失っているパスは少ない。
- ◆相手陣内までボールを運び、起点にしている回数が多い。また、4本以上のボール保持は1ゲーム平均13.8回で、11人制と比べて圧倒的に多くなった。
- ◆流れの中のシュートは、1ゲーム平均7.8本で8人制の方が11人制の1.7倍となった。また、プレーヤー1人に換算すると11人制が0.2本に対して、8人制は1.1本となりプレーヤー1人で見ると8人制は11人制の5倍となった。

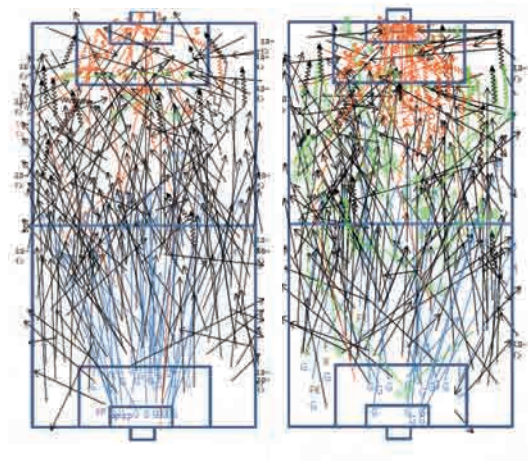
※11人制と8人制で共通していること

- シュートに至るパスの多くは、アタッキングサードを起点に出されている(ロングフィードのルーズボールを拾い、シュートにつなげることはある。しかし、自陣から精度の高いロングフィードがシュートへのパスになることは、この年代における11人制ではほとんどなかった)。

【左ページ図の、11人制3チーム、8人制4チームを重ねた図】

11人制10年全少、決勝
2チーム準決勝1チーム

8人制11年全少、11年
チビリン決勝4チーム



©Jリーグフォト

11人制と8人制の失ったパスの軌跡を合わせることで、明確に違いが表れてくる。

③Jクラブ(トップレベル)の検証

11人制と8人制の比較

2011年全日本少年サッカー大会決勝に進出した両チームの11人制と8人制のゲームを比較。

- ◆Jクラブのチームにおいても、11人制よりも8人制の方が相手陣内にパスの起点をつくる回数は多い。

- ◆4本以上のボール保持は4ゲームの平均が、11人制は7.5回、8人制が10.0回で、やや8人制の方が多かった。また、8人制は相手陣内の高い位置でボール保持ができていたが、11人制は自陣が多くなると、





©Jリーグフォト

相手陣内でもサイドでのボール保持が多く
なり、相手の中央エリアでの有効なボール
保持は少なかった。

◆流れの中でのシュートの本数は、11人制が
3.3本、8人制が8.5本で、8人制の方が
2.7倍多くなった。またプレーヤー1人に換
算すると、11人制は1人0.16本に対し、8
人制は0.52本で3.3倍となり、シュートに関
しては大きな差があった。

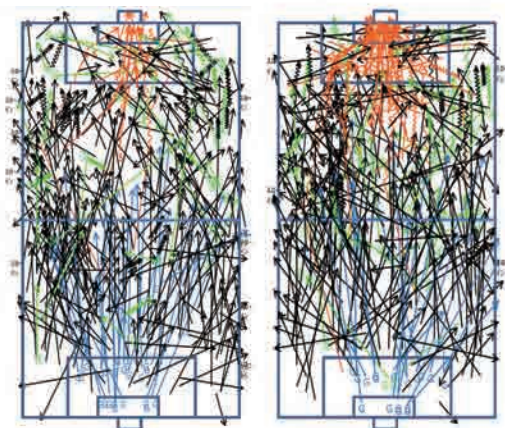
◆公式戦である全日本少年サッカー大会の
11人制では、自陣からのラフなロングフィ
ードが多くなっていたが、非公式戦(マリノ
スカップ)においては、自陣から意図を持って
組み立てることを行っていた。

しかし、自陣でボールを動かしていく意図を
持って組み立てをするが、相手が前から人
数を掛けてプレッシャーにくると、後ろや横
にボールを動かすことが多くなっていた(実
際のゲームも含めて検証)。

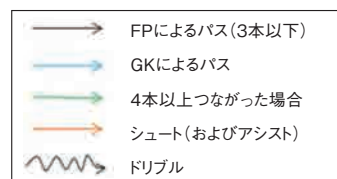
【前ページ右下図の11人制4ゲームと8人制
4ゲームを合わせた図】

Jクラブ(10年全少、
11年マリノスカップ)
11人制4ゲーム

Jクラブ(11年全少、
11年チビリン)
8人制4ゲーム



④Jクラブの8人制における大会別の検証



◆両チームとも自陣から意図を持った組み立
てを行っている。

◆全日本少年サッカー大会の方がチビリン



ピックよりも、自陣からのロングパスで失う
回数が多い。また、全体的にボールを失う
位置が低くなっている。

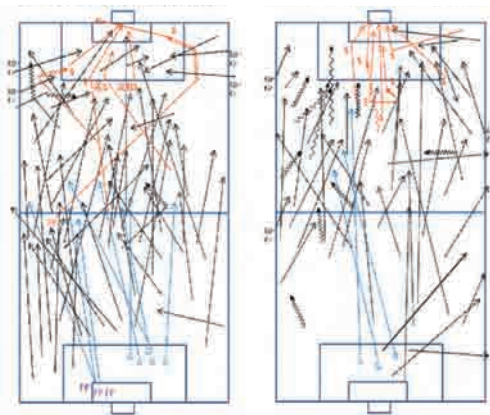
このことは全日本少年サッカー大会という
特別なプレッシャーがかかるゲームにおい
て、リスクを冒さず、攻撃を組み立て直すた
めに、ボールが下がる傾向が強くなっている
ことがうかがえる(実際のゲームも含めて検
証)。

⑤タウンクラブの検証

2010年全日本少年サッカー大会(11人制)と2011年全日本少年サッカー大会(8人制)において、両大会でベスト4以上に進出した同じクラブのボールを失った軌跡の検証。

タウンクラブ

11人制	8人制
2010 全少大会 決勝	2011 全少大会 準決勝



- ◆11人制と8人制の比較においては大きな違いはなく、11人制よりも8人制の方が高い位置までボールを運んでいくことができる。
- ◆4本以上のボール保持は11人制、8人制ともに0回であった。
- ◆流れの中のシュートは11人制が5本で、8人制が7本であった。

<失ったパスの軌跡における検証>

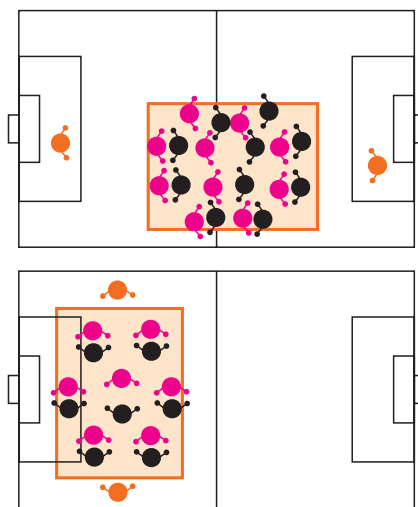
●11人制サッカーと8人制サッカー全般

この年代では、どのレベルでも11人制よりも8人制の方が、意図的な組み立てを行い、相手陣内に起点をつくることができていた。FPが3人少なくなることで、選手の距離感がうまくとれている。そのことが判断してプレーすることを可能にして、各選手の役割(攻守両面)を明確にしている。そして8人制は個人の能力が明確になることで、実力のあるチームが確実に勝ち上がってきていた。

11人制では密集した状態でのプレーが多くなり、グラウンダーのパスを成立させることが難しく、アバウトな浮き球で回避する場面が多くなっていた。11人制のゲームの中で意図的にボールを前

に運べない理由として、この年代はまだ筋力が整っていない選手が多いため、正確なロングフィードは筋力的に難しいと言える。そのことが、ピッチサイズにかかわらず、30~40mの範囲に両チームのFPが入り、一人一人の距離感が狭く、密集した状況でのプレーが多くなることが挙げられる。つまり、8人制におけるFP14人と、11人制における20人が同じ広さの中でプレーしていると言える。故に、8人制の方が各選手のスペースに余裕があり、判断する時間があることで意図的なプレーにつながり、成功回数を増やしていた。

また、11人制では、密集を回避するためにDFの背後にロングフィードを行うことが多くなっていた。しかし、先にも述べたように筋力不足から、十分な飛距離が出せない選手が多く、向かってくるボールの反発力を使ってのキックが多くなっていた。結果的に自陣内で向かってくるボールを、ディフェンスラインがワンタッチではね返すプレーが多かった。



●上位進出の力量があるJクラブ

この年代のトップレベルのチームと言えるJクラブは、11人制(マリノスカップ)でもGKからボールを大切に組み立てることを行っている。しかし、ボール保持エリアは自陣が多くなっていた。そして相手陣内ではサイドのエリアが多く、中央エリアで有効な起点は多くなかった。また、11人制の全日本少年大会という特別な環境のゲームにおいて、ラフなロングボールが多くなっていたのも事実であった。また、8人制においても、2011年

の全日本少年大会とチビリンピックでは、ボールを失ったパスの起点は、全日本少年大会の方が低い位置であった。これは、この年代のトップレベルのチームでも、技術面と精神面の両面において、選手としても、その他の部分でも未成熟であり、大会の背景などにより、ゲームの組み立てに違いが出てしまうことがうかがえる。しかし、このレベルにある選手たちであれば、11人制へのトライは十分できると思われる。8人制でのプレーの精度を高め、それを11人制に移行させていくことが必要であり、8人制と11人制をミックスさせて、選手育成を目指すことが重要だと考えられる。

●タウンクラブ

昨年と今年の全日本少年大会で、ベスト4以上に進出した同一タウンクラブは1クラブあった。11人制の2010年全日本少年大会では、縦に長いパスで失っていることが多かった。しかし、8人制の2011年全日本少年大会では、11人制よりも高い位置にボールを運び、相手陣内ではパスとドリブルでしかけていく場面をつくり、意図的なプレーが多く発揮されていた。しかし、4本以上のボール保持に関しては、Jクラブに比べて少ないことは否めなかった。タウンクラブの中ではトップレベルであると思われるが、さらに技術と判断の質を上げていくことが必要だと感じられた。

また、今回の8人制の全日本少年大会では、意図を持ったプレーにトライしていたチームは多かった。1次라운드では、実力差のある対戦もあり、プレッシャーを受けるとボール保持が不安定になり、ボールを失う場面も多くなった。しかし、同じ実力の対戦が多くなった、ドリームリーグ(1次ラウンド3位、4位チームのリーグ)の中では、自分たちのプレーができる確率が上がり、すばらしいゲームが展開されていた。8人制は個のレベルが、勝敗を分ける可能性が高くなるゲームであり、プレー回数の多さなどからも、個を育てることができるゲームと言える。

U-12年代は8人制をやり込んでいくことが個人のレベルアップにつながり、プレッシャーの中でも、ボールを失わずにゴールに向かうことが可能になる。8人制を通して、将来につながる選手育成にトライしていくことが有効だと思われる。

(次号に続く)